

モロッコのユダヤ人―研究事始め

堀 内 正 樹

はじめに

今から約一〇年前、モロッコの首都ラバトに暮らしていた頃、私は友人の薦めで、市の中心部のピエトリー広場に程近いところに店を構えるユダヤ人の床屋に通っていた。年輩の兄弟が二人で小さな店を営んでいた。二人とも無口なことでもあり、当初、何語で話しかけたらよいか戸惑ったことを覚えている。何のことはない。普通人々の話すダリージャ(アラビア語のモロッコ方言)でも、また第一外国語であるフランス語でも良かったのである。しかし、モロッコで出会った初めてのユダヤ人であったため、私の方に一種身構えたところがあってそうした戸惑いが生じたのだろう。昔習った現代ヘブライ

語の断片などを持ち出してきて話しかけたところ、さっぱり分かってもらえなくて、恥ずかしい思いをしたことがある。

その後モロッコで多くのユダヤ人に会うことになったが、このときの違和感と戸惑いは、程度の差こそあれ、いまだに消えていない。その原因は、一つには言語選択の問題が実はそれほど外的外れではなかったことにある。会う人によってダリージャ、フランス語、スペイン語、英語、正則アラビア語、そして現代ヘブライ語までが、それぞれの組み合わせで妥当性を持っているからである。その人が何語を用いるかということは、単に本人の生い立ちを示すだけでなく、モロッコのユダヤ人社会全体これまでの複雑な経緯をも物語っている。

一方、いまだに消えない戸惑いのもう一つの原因は、彼らの表情にある。ラバトからブ・レグレグ川を隔てたすぐ隣りにサレという古い町がある。その郊外にユダヤ人墓地があり、毎年六月になると、その墓地に埋葬されている一九世紀から今世紀初頭にかけて活躍したラファエル・アンカーワという名のラビを記念した「ヒッラー」と呼ばれる祭りが行われる。日没から集まってくるユダヤ人たちは、スーツやワンピースなどに身を包み、子供にも正装をさせて、にこやかに会話を交わし合う。聖者アンカーワの棺の上には立派なお堂が建てられていて、女性たちが墓石の上に花やお菓子、巨大な蠟燭などを置き、それを取り囲んでお喋りをする。男性は別の場所ですーラーを詠む。夜が更けると、大きな煙突を備えた竈に、それぞれが持ち寄った蠟燭の束を投げ込んで燃やす。こうしたときに人々の顔に現れるのは、喜びとともに自信に満ちた表情なのである。墓地は壁で囲まれて周囲の世界から隔絶された別世界になっている。その空間の中で彼らはフランス語で会話し、周囲に遠慮することなく、自分たちの満ち足りた世界で、過剰なほどの自信にあふれた表情を見せている。少なくとも、そのように見えた。

それは町の中ではめったに見せない表情のように私には感じられた。このことが、ムスリムの人々の生活に馴染んだ私にいまだに違和感を感じさせている。

一九九四年度と一九九五年度の二度にわたって、竹内啓一先生を研究代表者とする文部省科学研究費補助金による国際学術研究「地中海世界沿岸都市におけるマイノリティー集団のネットワーク」の一員に加えていただいた。これを機会に、あらためてモロッコ各地に住む大勢のユダヤの人々に会って、話を聞くことができた。だが、日本で培われたユダヤ人に対するバイアス、またモロッコなどアラブ世界各地で知らず知らず受け入れてしまっているバイアスの双方から私自身が解放されていないことを白状した上で、本稿では今日のモロッコに住むユダヤ人社会の近況を報告させていただく。なお、本稿の副題に「研究事始め」と付けたのは、私自身にとっての事始めであり、このテーマに関してはずでユダヤ人自身をはじめ欧米人による研究成果がかなり公表されており、またフランス保護領時代の文献も多数あることをお断りしておく。

話の順序としては、まずモロッコのユダヤ人の歴史的

経緯を簡単に振り返り、次いで今日のユダヤ社会の公的な組織形態を整理する。さらに、調査でのインタビューを通して得られた情報をもとに、信仰生活のあらましを述べてみたい。最後には、彼らの有するネットワークの若干の例を紹介しようと思う。

1 モロッコにおけるユダヤ人の歴史

(1) 古代⁽²⁾近世

モロッコ史に初めて登場するユダヤ人は、伝説ではダヴィデ王の時代に遡るといふ。だが資料的にユダヤ人の存在が確認されたのは、ローマ時代からである。現在は有名なローマ史跡として観光地にもなっているポリュビリウスから、青銅のメノラ(七枝の燭台)とヘブライ語による墓碑が発見されたからである。その数百年後、八世紀になってアラブ人(イスラム)が到来し、ポリュビリウスを含むゼルフーン地方に最初のイスラム王朝イドリス朝を打ち立てたとき、そこにもユダヤ人社会のあったことが記録されている。

ではこうしたユダヤ社会を構成したのは誰か。昔から地元に住んでいたベルベル人がユダヤ教に改宗したとい

う説と、ディアスポラのユダヤ人が住み着いた、とする二つの対立する見解がある。後者を支持する場合、この初期のユダヤ人は故地パレスチナの名にちなんで「プリシュティーム(Plestim)」と呼ばれる。この論争に決着をつける決定的な証拠はまだないらしいが、ともかくも、ユダヤ教を奉じベルベル語を話す人々がいた、という点だけ確認しておきたい。

八世紀以降のユダヤ社会は、イベリア半島のイスラム諸王朝の隆盛に歩を合わせるように、各地の共同体がかなりの自治権を認められた状態で、相互にネットワークを張り巡らし、西はアンダルシアから東はエルサレムやバグダードに至るまで、広範な人的交渉を持った。モロッコに限れば、ユダヤ人共同体はフェズなどの大都市はもちろん、アトラス以南のドラア川流域やシジルマッサ、そしてアトラス山中にまで居住地域が広がっていた。一〇世紀から一二世紀を頂点として、そうした村々からイスラム圏全域に名を馳せるような有名なラビが輩出されることもあった。

モロッコのユダヤ社会に一大転機をもたらしたのは、一五世紀末のイベリア半島におけるレコンキスタである。

多くのムスリムとともにイベリア半島を追われたユダヤ人は数波にわたってジブラルタル海峡を越え、モロッコ沿岸の諸都市（たとえばタンジエやテトゥワン、ララーシュ、サレなど）に上陸し、後にはシエフシヨーエンやフェズなど北部内陸の都市にも住み着いた。この時代以降、半島からアンダルシアの言語や文化を携えてやって来たユダヤ人を「メゴラシーム（追放者）」と呼び、それに対して従来からモロッコにいた人々を「トシャヴィーム（土着の人々）」と呼ぶようになった。一五世紀を通じて約六、八万人のメゴラシームがモロッコに定住し、ほぼ同数がモロッコを経由して他の地中海沿岸諸国に移っていったという。

メゴラシームは、ハキティイヤと呼ばれる言語（カステイリヤ語とアラビア語、古典ヘブライ語の融合したもの）とともにカステイリヤ法に基づく独自のミヌハグ（地域的法慣習）を持ち込んだために、在来（トシャヴィーム）のミヌハグと抵触し、各都市で両者の対立が顕在化した。やがてこの対立はメゴラシームの勝利に終わり、フェズを中心とした北部諸都市ではメゴラシーム、言い換えればセファルディーム（スペイン系ユダヤ人）が優

位を占めるようになる。この背景には、一六世紀の支配王朝サアド朝の対ユダヤ強硬姿勢に直面して、ユダヤ社会内部の対立は解消されざるを得なかったという事情も指摘されている。因みにこの時期、少なからぬ数のユダヤ人がイスラムへ改宗し、その子孫はカステイリヤ語系の家名を今日まで保持し続けている。

この後、現アラウィー王朝の前半期（一七—一九世紀）を通じて、ユダヤ共同体はメクネスやラバト、ジャディーダ、マラケシュといった他の都市にも拡大していった。それに伴いメゴラシームとトシャヴィームの文化は融合して、今日いうところのモロッコ・ユダヤの諸慣習が成立する。しかし、モロッコ南部の山間や砂漠地帯に展開していたトシャヴィームの諸村落には、一九世紀後半に至るまで、メゴラシームの影響はあまり見られなかった。

(2) 二〇世紀前半

事情は今世紀に入って大きく変わる。一九二二年から一九五六年までの間、モロッコ北部のリーフ地方はスペインの、その他の地域はフランスの保護領となった。この両地域においてユダヤ共同体に大きなインパクトを与

えたのは、パリに本拠を置く世界イスラエル同盟 (Alliance Israélite Universelle) の活動だった。この同盟(モロッコでは単にアリアンスと呼ぶことが多い)はユダヤ人の生活・文化の向上を目指して世界中に学校を設立し、フランス語教育を通じて「遅れた地域のユダヤ人の教化」を図った。その一環としてモロッコ国内でも、一八六二年にテトゥワンに最初の学校を開設したのを皮切りに、二〇世紀に入るとフェズやラバト、カサブランカ、マラケシュといった大都市をはじめ、現在のジヤディーダ、サファイ、スウェイラ、ララーシュ、タンジエなどの沿岸都市、さらにはユダヤ人口の多かった内陸のセフルーやデムナット、タザ、ウジダといった小都市にまで学校網を張り巡らした。⁽³⁾

それまで、主要都市にはトーラー学校(Talmud Torah)があつて、そこを窓口としてモロッコのユダヤ社会はエルサレムなど東方世界と繋がってはいしたが、都市部ではこの新設のアリアンスの存在によって、人々はそれまでとは異なる新しいユダヤ世界、つまりヨーロッパのユダヤ世界に接することになった。もっとも、フランスの保護領統治がアトラス山中やサハラ縁辺地域にま

で達するのは一九三〇年代のことであり、山間部に住む人々にとってはアリアンスどころかトーラー学校さえも縁遠く、彼らが広範なユダヤ世界と接するのは、エルサレムなどから時折り村々を巡回してくる「ハハム(Hakham)」と呼ばれた教師兼喜捨徴収人を通じてのみだった。⁽⁴⁾

アリアンスはセファルディームの伝統ばかりではなく、アシユケナージームの宗教伝統や新来のシオニズム思想なども、徐々にではあるが、モロッコにもたらした。こうした新たな情報ネットワークの導入と並んで重要なのは、この回路が人間移動のネットワークを拡大したことである。マルセイユやパリを通じて南北アメリカやパレスチナへの移住が可能となり、少なからぬ人々がそうした国々へ出掛けて行くようになった。そして一九四八年のイスラエル建国を迎えるのだが、モロッコのユダヤ人のイスラエルへの大量移住を呼び起こすには、なお数年の時間を要した。

(3) 二〇世紀後半

一九四〇年代の末から五〇年代にかけて、主要都市ではアリアンスが中心となってイスラエルへの移住希望者

のリストアップを進め、徐々に送り出しも始まっていた。だが決定的な契機となったのは一九五六年の保護領の終焉に伴うフランス軍の引き揚げとモロッコの独立だった。フランス保護領当局は第二次大戦中のヴィシー政権時代を除いて、⁽⁵⁾ ほぼユダヤ社会に対しては友好的に対処してきた。その後ろ盾を失うことへの不安と、新しいモロッコ国家の性格に関する先行きの不透明さ、さらには変動期の社会不安が重なって、ユダヤ人の大量国外脱出が引き起こされたといわれる。

一九五五年から五六年にかけてモロッコを脱出した人の数は五〇八万人と推定される。保護領時代のモロッコ国内のユダヤ人口は総数約二〇〇二五万人といわれているので、この一時期の脱出が如何に突然だったかが想像できる。ただし、この数字は正確なセンサスに基づくものではないので、およその見当をつけるのに役立つに過ぎない。⁽⁶⁾ ちなみに、ベニ・メラールよりも南西の地域のユダヤ共同体に関して詳細な報告を残したフラン (Flamand, P.) は、一九五〇年前後に各村落単位に個別に行われた保護領当局やユダヤ機関の人口調査の結果を集大成して一覽表にまとめているが、それを見る

と、南部モロッコだけでも、一七ヶ所の町や村（正確には「メッラーフ」と呼ばれたユダヤ人居住区）に合わせて五七、六七八人のユダヤ人が住んでいたことになっているので、上記数字はそれほど現実離れしたものではないだろう。⁽⁷⁾

フランマンのリストにはマラケシュ一六、〇〇〇人という数字も含まれているのだが、ほとんどは数十人程度の僻地の集落である。実は一九五六年の大脱出の主役がこれらの人々だった。ベルベル諸部族のあいだで質素に暮らし、都市部のユダヤ社会ともあまり接触することなく過ごしてきたトシャヴィームの伝統を受け継ぐ人々が、いわば村単位でござそりとイスラエルへ移住していった。彼らは個人名が登録されることもなく、カサブランカやアガディールの港から集団で船出するとマルセイユへ送られ、そこからすぐにイスラエルの港へと「緊急輸送」された。そして出身村単位で、今度はイスラエル国内の辺境の開拓村モシヤヴ (Moshav) へと移し替えられたのである。この脱出行を組織したのはカサブランカに拠点を置いていたカディマ (Gadima) という半公式のユダヤ機関であり、過酷な条件下での開拓生活に耐えうる候補

者として、こうしたトシャヴィームの人々に狙いを付けたと。カディマはまた大都市の中下層の若者にもターゲットを絞り、同じように大量輸送を行った。⁽⁸⁾

結局この時期にイスラエルへと移ったのが貧困層や山間部の人々だったのに対し、都市部のアリアンスなどを通じて国外に出た中流以上の人々は他の国々を目的地とすることが多かった。その代表はもちろんフランスだったが、その他にもセファルディームの共同体のあった南北アメリカも目指された。

次に来るいわば第二波の流出期は一九六二年である。この年、独立の父ともいわれ、ヴィシー政権下でのナチスによるユダヤ人拘禁例に反対してユダヤ人の権利を擁護したこともあるムハンマド五世国王が没し、年若いハサン二世現国王が即位した。独立期と同じように将来への不安が高まり、また独立直後のモロッコ経済の停滞も相俟って、中下層の人々や地方に残っていた人々のほとんどがイスラエルへ移住した。その数は約一〇万人とされている。また都市部のおもにフランス語教育を受けた人々も、他の国々を目指して国外脱出を敢行した。

これに続き、第三波の脱出が一九六七年の第三次中東

戦争を契機として訪れた。また一九七三年の十月戦争も同様の脱出行動をもたらした。これらの脱出に特徴的なのは、主たる行き先がイスラエルではなく、従来から散発的に移住が行われていた欧米や南米の国々であったことである。一九八〇年頃までに、フランスには五万人、スペイン、ブラジル、アルゼンチン、ベネズエラなどに一万五千人、カナダに三万人、合衆国に一人、その他オーストラリア、イギリス、ベルギー、スイスなどにも若干のモロッコ系ユダヤ人が定着したという。彼らがイスラエルを避けた理由としては、一つには戦争状態への恐怖感があり、他方第一波、第二波で移住していった仲間たちのイスラエルでの生活状況が悲惨なものだったという情報が入っていたからだといわれる。⁽⁹⁾

一九八〇年代以降、最終的にモロッコに残ったユダヤ人は一〜二万人と推定される。彼らの生活環境は比較的安定しており、モロッコ政府との関係も良好に推移している。それを政治的に象徴するのが閣僚人事で、近年、国王顧問や観光大臣にユダヤ人が登用されたりしている。また国会議員や軍の将校にもユダヤ人が加わっている。

2 現在のユダヤ人社会の組織

(1) 自治組織⁽¹⁰⁾

モロッコ国内に住むユダヤ人は、そのほとんどが都市に集中している。しかもカサブランカ一極集中といつて良い状態で、他の諸都市には多くて数百人前後しか住人がいないのに対して、カサブランカには約一万人ほどが暮らしている。しかしどの都市もそれぞれの独立した共同体組織を有し、カサブランカとして形式上はそのひとつにすぎない。こうした共同体は各都市の名を冠した「イスラエル共同体 (Communauté Israélite)」と呼ばれ、代表の下に副代表、事務局長、会計、理事を置く組織体として機能している。それぞれの都市のユダヤ住民の利益を公式に代表し、独自の予算によって住民の生活の便宜を図る自治組織である。現在この組織が置かれているのは、カサブランカ、ラバト、フェズ、タンジエ、メクネス、マラケシュ、アガデール、サファイー、テトゥワン、ウジダであり、その他の町村に居住する人々はこれらのうちの最寄りの共同体に属する。

各イスラエル共同体が管轄するのは、もっぱら宗教生

活に関わる事柄である。その主なものを順に挙げると、まずシナゴグの運営がある。礼拝の指導者ラビは共同体には拘束されないが、シナゴグの施設の保守・運営は共同体が責任を持つ。次には墓地の管理がある。どの都市にもユダヤ人専用の墓地があり、満杯となって使用されなくなった古い墓地まで含め、その管理を共同体が行う。なお、墓地の管理人(墓守)はユダヤ人である必要はなく、実際、ムスリムが雇用されている場合が多いことをつけ加えておこう。日常生活に関わることとしては、ユダヤ教徒専用の食品(コシエル食品)の確保という仕事がある。とりわけ食肉についてはユダヤ教徒が屠殺したものを以外は食べられないので、屠殺から販売までを扱う食肉店の経営を確保する事が重要な任務になる。このほかには割礼の世話がある。かつては家庭に出張する専門の割礼師がいたことだが、現在はほとんどが、後述するユダヤ人病院で行われる。最後に挙げるのは宗教財 (maqdesh) の運営である。シナゴグや墓地も宗教財によって運営されるのが原則だが、それ以外に福祉施設や医療施設の一部も宗教財によって賄われる。こうした資金の配分や運用が共同体の仕事になっている。

以上がいわば公式の機能なのだが、非公式かつ実際上は、共同体は様々な情報の管理センターの機能も果たしている。住民が他の都市や国外に出掛けるとき、その情報提供窓口になり、また外部からの客を受け入れる窓口になるのも共同体である。

こうした都市ごとの共同体は、モロッコ全体で一つの組織に統合される。「全モロッコ・イスラエル共同体会議 (Conseil des Communautés Israélites du Maroc)」というのがその名称で、事務局長を筆頭に補佐、会計、理事がそれぞれ複数置かれていた。この会議はモロッコ政府に対して、モロッコ在住ユダヤ人全体を公式に代表する機能を果たす。そして内務大臣がこの会議を監督する形になっている。

(2) ユダヤ人の法的地位⁽¹⁾

共同体会議が内務大臣管轄になっているのは、ユダヤ人の法的地位に関係している。現在のモロッコ王国の法体系は、国王が国民投票に諮って発布する憲法に基礎を置き、個別には議会に諮った上で公布する勅令によって組織されている。そのいずれもがイスラム法に基づくものとされているので、ユダヤ教徒に対してはこの法体系

が適用されない。しかしユダヤ教徒も、モロッコ国民としてにはムスリムと同等の権利が保障されている。この間の矛盾を解消するために、ユダヤ教徒に対しては私法領域の独立性が認められ、各レベルの裁判所にユダヤ人の係争に関する特別のセクションが設置されている。しかし公法領域においてはユダヤ教徒も国家の法体系に拘束されるものと考えられ、法務省にはユダヤ法専門の顧問が置かれている。

一方、こうした法的地位に対応して、法を執行する行政分野において独立性を付与されたのが共同体会議である。理論上共同体会議は私法に相当する分野の自治権を承認されているだけで、その権限は公法の執行に責任を持つ内務大臣の監督を受けることになるわけである。

(3) モロッコ系ユダヤ人世界会議⁽²⁾

「全モロッコ・イスラエル共同体会議」は国内のユダヤ社会を代表するだけでなく、もう一つ別の顔を持っている。それは、世界各地に離散したモロッコ出身のユダヤ人をもつにつなぐネットワークの要塔とうとしてのことである。一九七六年に、のちに国王顧問になるアン・ドレ・アズレイが、パリでモロッコ系ユダヤ人の大同団

結を呼びかけたのが始まりで、その二年後、全モロッコ・イスラエル共同体会議が主催して、パリでモロッコ出身のユダヤ知識人を集めたシンポジウムが開かれた。さらに一九八四年には首都ラバトで初の大会が開かれ、モロッコの皇太子や内務大臣が出席した。つまり、こうした動きがモロッコ政府公認の下で進められたわけである。アラブ諸国とイスラエルがまだ対立状態にあった中で動きだけに、モロッコ政府はアラブ側からの反発と懷疑を受けたのであるが、イスラエル国家とユダヤ人の存在とを別の問題だとする国王の姿勢が貫かれた。キップール（贖罪日）やユダヤ聖者の祭りなどに際してイスラエルの国会議員がモロッコへ里帰りすることさえも認められたのである。

こうして一九八五年には、このネットワークが公式に組織の形を整えることになった。カナダのモントリオールで「モロッコ系ユダヤ人世界会議 (Rassemblement Mondial des Juifs Marocains)」の設立総会が催されたのである。このときに参加したのは九カ国を代表する一五〇人で、その国別内訳は当時のモロッコ系ユダヤ人の分布状態を反映していて興味深い。次の通りである。

モロッコ、イスラエル、カナダ、フランス、スペイン、イギリス、アメリカ、スイス、ベネズエラ。このほかブラジル、メキシコ、日本からも祝電が届いた。以後この会議の本部はパリに置かれ、二年毎に総会を開催することが決められた。

しかし、本来個人ベースのネットワークであるはずのこの組織が、政治的に機能しなかったわけではない。たとえば、同じ一九八五年にモロッコで行われたハサン二世国王とイスラエルのペレス首相の会談は、キップールを名目に事前にモロッコを訪れた国会議員の下準備があった。

(4) その他の組織¹³⁾

各都市の共同体の枠を超えて、モロッコ全域のユダヤ人に関わる組織としては以下のようなものがある。教育に関するものと医療・福祉に関するものがほとんどである。なお、これらの組織や団体に対して大口の資金援助をしている団体として、アメリカに本部を置く「アメリカ合同配分委員会 (American Joint Distribution Committee)」がある。この委員会は各地の共同体と連携して、以下に挙げるほとんどの活動に対し、資金的、

人的援助を行っている。

① イッティハード・アル・マグリブ (Itrihad al-Maghrif)

教育施設の代表的なものが、このイッティハードである。前身は先述のアリアンス (Vaillance Israelite Universelle) で、一八六二年にテトゥワンに開設されたのが最初である。従来から主要都市にあったトーラー学校とは違って、ユダヤ人にフランス式の近代教育を授けることが基本方針だった。保護領時代を経て、一九六〇年に現在の名称に変わった。幼稚園から高校までを備え、カサブランカをはじめとしてフェズ、メクネス、マラケシュ、タンジエに学校網を持っている。現代ヘブライ語やユダヤ教の宗教教育も行われるが、フランス語をベースにスペイン語とアラビア語も交え、原則として近代教育を旨として運営されている。このため、ムスリムの子弟にも入学が開放されており、部分的に政府からの資金援助も受けている。生徒数は全部で一五〇〇人である。

② ルバヴィッチ (Lubavitch)

幼稚園や小学校、宗教専門学校なども擁する学校組織だが、主流は女子教育である。一九五一年に設立された

カサブランカ校だけが残っていて、生徒数は約五〇〇。

③ オザル・ハ・トーラー (Ozar Ha-Tora)

ユダヤ教の専門教育を行う学校で、一九四七年に個人によって設立された。かつてのトーラー学校の機能を引き継いだ形になっている。

④ 職業訓練校 (Organisation Reconstruction Travail)

一九四七年に設立され、男女別に職業訓練を施す。生徒数約三〇〇。

⑤ 児童福祉事業団 (Oeuvre de Secours a l'Enfance)

一九四七年に設立された組織で、名称が示すような子供の医療ケアの他に、むしろ病人と老人の医療・福祉に活動の重心を置いている。病院、孤児院、養老院などを経営する。ユダヤ教徒に不可欠な割礼手術も、この組織の病院で行われる。

⑥ その他

このほかボーイスカウトやガールスカウト、慈善団体、文化団体、スポーツクラブなどもある。

3 信仰生活

(1) シナゴークと礼拝

ユダヤ人の信仰生活を支える中心的な場は、いうまでもなくシナゴークである。保護領時代には全国で五〇〇八〇ヶ所のシナゴークがあったそうだが、五〇年代以降のユダヤ人大量脱出によって実際に使用されるシナゴークの数は激減し、現在では以下のような数字になっている。なおこれは今次調査で主要都市を巡り、各地の共同体の關係者から得た情報であり、訪れなかった場所については間接情報による。括弧内はそれぞれの共同体の推定人口である。

カサブランカ……………七(二,〇〇〇)	ラバト……………二(六〇〇)
フェズ……………三(五〇〇)	ケニトラ……………一
タンジュ……………四(一,〇〇〇)	テトゥワン……………一(一〇〇)
メクネス……………三	マラケシュ……………四(三,五〇〇)
アガディール……………一	サファイ……………一(六〇)

以上の他ジャディード、イネズガン、ウエッサーンにも一ヶ所ずつあるというが、おそらく聖者廟に付置されたもので、恒常的に使用されているものではないよう

に思われる。

シナゴークは礼拝の場所なので、原則として毎日開放されなければならないが、礼拝は一三歳以上の男子が一〇人以上集まる必要があるので、人口の少ない地方都市の場合、実質的に毎日の使用が難しい。そこで安息日の土曜日のみ使用されているところも多い。また、かつて三万人を越えるユダヤ人が集まっていたというスウエイラ(旧モガドール)という港町では、現在の居住者が七家族しかなく、シナゴークは施設としては存在しても、毎週土曜日の前日になると礼拝のためカサブランカまで出掛けなければならないという例もある。

シナゴークはまた、通常の礼拝以外に成人式や割礼時の特別な礼拝や、結婚式にも使用される。こうした際、ふだんは二階席や隣室に隔離されている女性たちも、中央の礼拝席に座ることが許される。

シナゴークはユダヤ教徒ならば誰にでも開放されている。したがって旅行者などであっても、通りかかった場所地元共同体の人々に混じって礼拝して構わない。私が見学を許されたマラケシュでの土曜礼拝の模様を紹介すると、まず朝九時頃から全員が席に着いて、シナゴーク

グに備え付けの聖書をそれぞれ手にして、約一時間ほどトラーの朗唱を行う。そのあとラビが祭壇の前に立って、ヘブライ語の混じったダリージャ(モロッコ方言アラビア語)とフランス語を交互に駆使しながら講話を行い、その最後に、この日飛び入りで礼拝に加わったゲスト(旅行者)の名を挙げて、彼が共同体に寄付した金額とともに全員に紹介する。このあとエルサレムの方向の壁の中に設けられたアロン・ハコデシュと呼ばれる聖所からトラーの巨大な巻物が祭壇へと運び出され、その日読む部分が開陳される。そして紹介されたゲストが一人ずつ呼ばれて、ラビが棒で指示する部分を読む。このように、シナゴグは閉ざされた教区のようなものではなく、行き交うユダヤ教徒の中継地点となっている。

(2) 祭儀生活

今世紀初頭にアリアンスが本格的に活動を開始して以来、モロッコのユダヤ人も、世界の他の場所のユダヤ教徒と同じ基本的祭儀を行うようになった。新年祭に始まり神殿滅亡記念日に終わる一〇の祭儀である。ただし細部ではモロッコ固有の特徴も残している。そのひとつは「ゲダリーヤ(Gedalya)」と呼ばれる断食である。か

つてはユダヤ暦一月一日の新年祭(Rosh Ha-Shana)から一〇日の贖罪日(Yom Kippur)までの一〇日間断食をしたそうだが、現在では人によって異なるが、おおむね二日程度になっているという。もう一つの特徴的な慣行は「ミムーナ(Mimouna)」で、ユダヤ暦七月一四日から一週間行われる過越祭(Pesach)の最終日に、子羊を供犠するというものである。この慣行はモロッコ系ユダヤ人によってイスラエルに持ち込まれ、現在は国家的な行事になっているという。

一方、世界に散らばったモロッコ系ユダヤ人に精神的一体感を付与する最大の契機は、聖者祭である。本稿の冒頭で紹介したラファエル・アンカーワの祭りはその一例である。かつて活躍したラビや特別な資質を顕した人物に、幸運と奇跡を祈願するというもので、仮にこれらの人物を聖者と呼ぶとすれば(正統派ユダヤ教徒は預言者以外の人間に聖性を認めない)、その祭り聖者祭はモロッコ、アルジェリア、チュニジアなどマグレブ諸国に暮らしたユダヤ人にとっては当たり前の行事であるが、他の世界のユダヤ人には馴染みの薄い独特の慣行といえる。聖者祭は「ヒルラ(Hilula)」と呼ばれ、聖者

の墓に年一回人々が集まり、冒頭で紹介したような行事を行う。歌や踊りを伴うこともある。

聖者の墓は、上述のラファエル・アンカーワやフェズの聖女ソリカのように、ユダヤ人の共同墓地の中にあつて、その一角だけが蠟燭を燃やす竈や天蓋つきの東屋が建てられるなどの工夫が凝らされる場合と、ウェッザーン郊外のアスジン村にある聖者アムラーン・ベン・ディーンワーンやセッタート近郊のフジェイラ村のはずれにある聖者ヤヒヤ・アフダルのように、その人物の墓を中心に廟やシナゴグなどの立派な建物群が作られ、あとから一般の人々の墓が加えられてゆく場合とがある。両者ともとりあえず廟と呼ぶとすれば、モロッコには現在約四〇ほどの聖者廟が点在する。保護領時代以前には一〇〇とか、多いものになると六〇〇とかの廟があつたといわれるが、キリスト教のカトリック世界のように聖者が列聖化されているわけではないので、たとえ現在に於いてもその数を特定することはできない。周囲のモロッコのイスラム聖者の場合と同様に、聖者であるかどうかはそこを訪れる人の数に依存することになるわけで、聖者を規定する統一基準やそれを正統化する機関は存在しな

い。

ただしこの点で興味深い例がある。私が訪れた一七の廟のうち、唯一サファイアのアブラハム・ベン・ジェミール廟にだけ、モロッコのユダヤ聖者をまとめて祀つてある建物がある。港を見下ろす丘の上に、真新しい白亜の廟とシナゴグと、調理場つきの広いホールとが一群をなしているのだが、その廟の内部は、中央に聖者ベン・ジェミールとその縁者七人の棺が安置され、それを取り囲むように四方の壁にモロッコの著名な聖者二七人の肖像画が名前とともに掲げられているのである。サファイアには現在一〇家族程度しか居住せず、地元にはラビがいなため土曜日にはマラケシュから呼んでくるという状況を考えると、新築のこの壮大な墓廟は、明らかに近年のユダヤ人社会の新たな集合場所たらんことを意図して、改築されたものと考えられる。その場所に掲げられた二七人は、近年のモロッコ系ユダヤ人のアイデンティティ高揚と意識覚醒の動きに歩を合わせた「伝統の創造」行為を象徴するものといえるだろう。列聖化というそれまで縁のなかつた考え方自体が、カトリック世界を意識した創造行為であるのは間違いない。

聖者祭が集中するのはラグ・ベ・オーメルという祭日(ユダヤ暦八月イヤル月の一日で、過越祭ベサハから数えて三三日目。五旬祭シャブオットまでの服喪期間の終盤にあたり、この日だけ歌舞や祝祭が許され、散髪や髭剃りも許される。太陽暦の六月初旬)であるが、仮装祭プリムなど他の祭日や、聖者の没した日に催されることもある。

こうした聖者信仰を正当化する際によく引き合いに出されるのが、ユダヤ神秘主義カバラの基本教典ゾーハル(Zohar)である。ゾーハルは二三世紀後半に成立し、スペインを追われたメゴラシムがモロッコにもたらしたとされる。聖者の存在を正当化するこの教典は、その後モロッコの隅々にまで浸透した。マラケシュ南方のアトラス山中の村からイスラエルへ集団移住した人々に関する記録を読むと、彼らの若年時代はトラーというよりもむしろゾーハルの朗唱が宗教生活の中心だったという⁽¹⁴⁾。

ゾーハルおよび聖者信仰に関して興味深いのは、それがモロッコで大衆化してゆく過程が、一六世紀以降のスーフィズム(イスラム神秘主義)の大衆化過程と時代的

に重なっていることである。スーフィズムの大衆化がそれまでの墓参や聖者信仰を正当化することになったのと、ユダヤの聖者信仰の進展とが重複するのである。大都市部で展開される醒めた教義に対して、地方や山村に於いて実感に訴える熱い信仰が浸透していったという点では、ムスリムとユダヤは、ともに違和感のない形で宗教生活の共存を受け入れていたのではなからうか。これが単に理論上の推論でない証左として、保護領時代の記述を挙げることができよう。そこには、ユダヤ教徒が訪れたイスラム聖者一四名、ムスリムが訪れたユダヤ聖者五五名⁽¹⁵⁾が挙げられているからである。今日ではおよそ考えられないこうした相互乗り入れは、墓地が壁で囲まれる以前には、おそらく容易に行われたであろう。

聖者信仰についてさらにつけ加えるべきは、これが単に宗教生活上のイベントではないということである。ムスリムの聖者祭「ムーセム」にもいえることだが、ネットワーク社会にあって、このイベントは日常の人々の潜在的なネットワークを顕在化させるための不可欠な場なのである。日々移ろいゆく人と人の関係は、それが親族であれ部族であれ、あるいは商売上の友人関係であれ、

放っておいては縁遠いものになってゆく。決まった日に決まった場所に集うことによって、それらの関係は目に見えるものとなり、維持され、再構築され、または破壊される。その意味で、モロッコ系ユダヤ人が相互のネットワークを維持する必要を感じ続ける限り、聖者もまた再生産され続けねばならないだろう。

最近になって、欧米やイスラエルからモロッコを再び訪れる「一時帰郷者」の姿が目につく。イスラエルへの移住組は世代交代が進んで、かつての悲惨な記憶が薄らいだといわれ、またアラブ諸国とイスラエルの間の政治的雪解けムードもその原因とされる。単独でやって来て、廃村になってしまったかつて親たちの暮らした場所を訪れる若者もいれば、団体で観光バスを仕立てて聖者廟巡りをする「巡礼ツアー」もある。これを単なるノスタルジーと受け取っては不十分だろう。確かに聖者や墓（聖者のであれ近親者のであれ）を通じて、モロッコの特定の土地への精神的絆が保たれていることは否定できないだろうし、それがモロッコ出身者の「モロッコ主義」のアイデンティティの中核をなしているだろうことも想像できる。モロッコ系ユダヤ人世界会議が表看板の一つに

掲げる「ユダヤ文化とモロッコ文化の融合」も、こうした精神生活の共有部分を念頭に置いている。しかしそれと同時に重要なことは、聖者祭や幾つかの正統的祭祀を契機としてネットワークの活性化が図られる、という社会学的意味合いである。誇張していえば、それらの機会 は人と人が接触するための単なる口実であったとしても、それでよいのである。

4 ネットワーク

人が作っているネットワークは流動性が高い上に秘密性を帯び、その性質も一定していないので、その姿を知るのは方法論的にも技術的にも多大な困難を抱えている。しかし最後に実例を幾つか簡単に紹介して、その一端を覗いてみたい。

ルイスさんは、母親がリオデジャネイロのセファルディー共同体の名家の生まれで、モロッコ生まれの父がリオデジャネイロに出稼ぎに行ったとき知り合ったらしい。今でもリオデジャネイロには親戚がいる。母はその後カサブランカに住んでいたが、ルイスさんの姉がカナダへ渡って結婚し、母と兄弟をカナダへ呼んだ。一九六四年

に彼らはトロントへ行って、現在もそこにいる。ルイスさん自身はモロッコで生まれた。奥さんもモロッコ生まれだが、若い頃スペインで勉強して助産婦の資格を取った。息子の一人はフランス人女性と結婚してフランスで教師をしている。もう一人の息子はスペイン人女性と結婚してスペイン在住。娘はパリにいる。

周囲のユダヤ人がごっそりイスラエルに移住した山間の村に残ったハニニヤさんは、六年前に二ヶ月間だけイスラエルへ行ったことはあるが、それ以外はずっと村で暮らしてきた。親族はみなイスラエルにいて、彼だけが奥さんと村にいる。

コーエンさんと奥さんは、モロッコとフランスのパスポートを持っているので、頻繁にフランスを往復している。子供たちは皆フランスに住み、フランス国籍になっている。コーエンさん自身は年に三回イスラエルへ行ったこともある。

ダヴィッドさんはカナダとモロッコのパスポートを持っている。兄弟と姉妹がモントリオールに住んでいる。彼自身はモロッコで一人暮らし。

旅行者として久しぶりにモロッコを訪れたイサクさん

は、モロッコ北部の町に生まれ、一七歳でイスラエルに渡った。その後アメリカに移住し、ニューヨークで働いている。

ゲッススさんはモロッコとイスラエルを往復している。奥さんはイスラエルに住み、娘はトゥールーズにいる。

おわりに

ユダヤ人の社会が被った歴史的経緯や、宗教教義に関する研究、あるいは政治領域におけるユダヤ人の果たす役割などに関しては、膨大な文献が蓄積されている。モロッコのユダヤ人に限っても、かなりの数の文献がすぐにある。この文字の大海原の中から生の人間の顔を拾い出すことがどれだけできるのだろうか、とつい訝ってしまう。現代イスラエルの研究機関は当然それなりの精力を投入して自分たちの同胞に関する研究を進め、欧米の研究者もそれなりの努力をしている。しかしそこに「ユダヤ人」という限定詞を外して語り得るものがどれだけあるのだろうか。「はじめに」で述べたように、私を含めて、また《同胞》を扱うユダヤの研究者からさえも、

「ユダヤ人」には様々なバイアスが幾重にも掛けられている。政治的、宗教的、歴史的、イデオロギー的のバイアスがその最たるものだが、それ以外に純然たる学問的関心に基づくというふりをしてみたところで、そこでは特殊なマイノリティとしての意味付けが当初から不可避に前提とされてしまう。何とかユダヤという限定詞抜きユダヤ研究ができないものだろうか、と、大海原を前に考え込んでしまうのである。

- (1) 第一次調査については齊藤美津子氏(在モロッコ日本大使館)、第二次調査については立石博高氏(東京外国語大学)、臼杵陽氏(国立民族学博物館)にそれぞれお世話になった。感謝申し上げる。
- (2) 本節で述べる古代から近世までの記述は、以下の著作の必要部分をまとめたものである。[Zafarani, H. 1972. 1983, Chouragui, A. 1987, Deshen, S. 1991]
- (3) モロッコにおけるフリマンズの活動については [Las-kier, M. M. 1983] に詳しく。
- (4) [Shokeid, M. 1985] は、この地域からイスラエルに移住した人々をイスラエル国内の開拓村で調査し、モロッコ時代の状況を人々の回想というかたちで記録している。
- (5) ヴィシー政権と北アフリカのユダヤ社会の関係について

て、[Abitbol, M. 1983] が、政治学的分析を行っている。(6) この時代のユダヤ人口は文献によりまちまちなので、とりあえずはカサブランカ・イスラエル共同体事務局長の説明による数字を採用しておく。

(7) [Flanand, P.]. この文献の発行年は不詳だが、一九五〇年から一九五六年のあいだに出版されたものと思われる。

(8) カディマや他のユダヤ機関が行った輸送「作戦」については、若干ジャーナリスティックではあるが、[Bensimon, A. 1991] が参考になる。

(9) カサブランカ共同体事務局長談話、および [Lassy, J. C. & Tapia, C. (eds.) 1989] を参考にした。

(10) この節の情報は、各都市のイスラエル共同体関係者とのインタビュー結果を総合した。

(11) ユダヤ人の法的地位については、元最高裁顧問ザグーリー氏の指摘が参考になった。

(12) この会議設立の経緯は、当時の新聞報道 (*Le Matin du Sahara* 1985. 10. 28, *al-Ayam* 1985. 10. 23 など) およびカサブランカ・イスラエル共同体事務局長の説明に依ってゐる。

(13) この節に掲げた諸団体については全モロッコ・イスラエル共同体会議の発行するパンフレット [La Communauté Juive du Maroc] に詳しい説明があり、またカサブランカ・イスラエル共同体の代表トレダノ氏には追加説明のほか、いくつかの施設にも案内して頂いた。感謝申し上げます。

た。

(14) [Shokeid, M. 1985, p. 29]

(15) [Voinol, L. 1948, p. 85]。なや、この本は保護領時代
までのユダヤ聖地の名称、場所、略歴などを記した一種の
百科事典である。また、同様の聖地リストに加えて聖地を
めぐり巡拝願への「訳社」や手懸やくを記したものが
[Ben-Ami, I. 1990] がある。

参照文献

Abitbol, Michel. 1983, *Les Juifs d'Afrique du Nord* sous
Vahy. Paris: Maisonneuve & Larose.

Ben-Ami, Issachar. 1990, *Culte des Saints et Pèlerinages
Judeo-Muslimans au Maroc*. Paris: Maison neuve &
Larose.

Bensimon, Agnès. 1991, *Hassan II et les Juifs: Histoire
d'une émigration secrète*. Paris: Seuil.

Chouragui, André. 1987, *Histoire des Juifs en Afrique
du Nord*. Paris: Hachette.

Deshon, Shlomo. 1991, *Les Gens du Mellah: La vie
juive au Maroc à l'époque pré-coloniale*. Paris: Albin

Michel.

Flamand, Pierre. *Les Communautés Israélites du Sud-
Marocain: Essai de description et d'analyse de la vie
juive en milieu berbère*.

Laskier, Michael. M. 1983, *The Alliance Israélite Univers-
elle and the Jewish Communities of Morocco 1862-
1962*. Albany: State University of New York Press.

Lasry, Jean-Claude, & Claude Tapia (eds.) 1989, *Les
Juifs du Maghreb: Diasporas contemporaines*. Mon-
tréal: Les Presses de l'Université de Montréal.

Shokeid, Moshe. 1985, *The Dual Heritage: Immigrants
from the Atlas Mountains in an Israeli Village*. New
Brunswick: Transaction Books.

Voinol, L. 1948, *Pèlerinages Judeo-Muslimans du
Maroc*. Paris: Larose.

Zafrani, Haim. 1972, *Les Juifs du Maroc: Vie sociale,
économique et religieuse*. Paris: Geuthner.

——— 1983, *Mille Ans de Vie Juive au Maroc*.
Paris: Maisonneuve & Larose.

本稿は、平成六・七年度文部省科学研究費補助金・国際
学術調査「地中海沿岸沿岸都市におけるマイノリティー集
団のネットワーク」(研究代表者、竹内啓一、課題番号〇
六〇四一〇四〇)による研究成果の一節である。

(広島市立大学助教)